

夜の手鋏

『新壘』
56-1号

ふか

サルビアの朱の遽さに倒れこみわれとわが身のぬきさし
ならず

いち枚の鰯を焼くと熾す火のまづあかあかとわが頬を
灼く

おろかにも超え得ざることの痛切に霜月の夜を鳴らす
手鋏

灯を消して価値もなけれど揺げゆく孤りのこころ闇
にうすずむ

焼きたての麺麴が胸より温みきて抱けるものかなし
さにゐつ

冬の檸檬

『新壑』2
56-2号

檸檬とふ文字のあとさきのとまどひにしきりなる冬の
酸のしたたり

なべてのもの団ぢこめし胸に響り合ふは雪のきしみと
闇のこがらし

身の温み奪ひつくされし冬の野に未だ屈せざるわがこ
ろざし

赴きたき地を恋ふはいつも雪の日敢へて迷路を歩まむ
ために

冬至の夕べ俎上にことされし南瓜その半月のかがやかし
き黄金

人斬るにあらずもの刻むにはあらね己れあやめむため
の刃を研ぐ

身をそぐに似て鉛筆の朱を削るまがふなき血の彩に
決るも

うた

解きつづけ迷いつづけし詩ひとつおぼかなくてすでに如
月

口より先にこころ噤める暗澹をこぼしつつゆくわが冬の
道

震へつのみどに鳴らし飲む水の寒の冷たさいのちの脆さ

雪ぶすま

『新壑』4号

雪ぶすまに雪掻き上ぐる冬ごもり無援を培ひ孤をた
たしめて

雪街のななかまど一樹は亡父の樹口喧ましく朱実を
零す

しんしんと寒の極みの夕闇に念ひは身の凍裂に至るも

洩らしたる言葉ひとつの関はりに雪は樹にふりわが肩
に降る

もくもくと牛蒡を削る母のかたはらにして育つ思想の
昏し

傘の雪

『新壑』5
56-5号

森に入りまとふは終身にぬばたま冬にしていよよ遠き
混沌

春の雪傘に重たく積らせてあらはなるわが業の象の

己が身の己れであるよりはかなくて今日のらんるは襪
褌もて繕ふ

誰も手を打ち鳴らすなければわがひと生かごめの輪の
中にとり残されむ

みずからの髪整ふる理髪師の鉄鳴ろすたび猫の目を閉
づ

待つ初夏

『新壑』
56-6号

樹々の芽のなべて尖がれる明るさにやうやくわれの目の
聡かりし

凋れゆくは春のわが詩歌ブロッコリーの熱湯にくぐりて
よりあをあをし

風ひかり野山もひかる初夏の午睡の夢のうたた眩ゆ
く

歩をとめてまだ揺れやまぬ耳飾りの陽に傾くひとつが
む
喚ぶ初夏

断ちきりし念ひにきりきり襲ひきてしばし疼くはこ
めかみあたり

桜花の径

『新壑』
56-7号

空ひくく思慕をけだるく石の径蹴散らし来しは桜の
淡紅

謀られておとしめられてありし故つくづく桜花のかな
しみの彩

はな

散らぬ間の桜花の回答をかいま見の身のゆくて既にた
だならずも

にんげんに関はり持たぬひと日暮れわが魔性の極まれ
るアンニユイ

よな

詩のはか繋ぐ何もなく火山灰あまた降る旅の街よる
の灯の色

空の初夏

『新壑』
56-8号

透明とも不透明ともはづされし眼鏡はわたくし不在
のまなこ

初夏・胸透くばかりの野の景よつくづく無音のさきはひ
にるる

牡丹花の散るさきふれと口ずさむ詩の数行があなたに
関はる

燃えに燃え沈みなづみてけふ夏至の夕陽がふいに胸元
へくる

片手間の愛などとしりげなけれども闇に窪むまでの
己れみつむる

夕焼けよ麦藁帽子購ひためて如何なる明日もわれに
整ふ

夕映えにあくがれのみが過ぎ去りてしつかり舞ひくる
余命告知書

白き襯衣さらに晒さむと濯ぎるる水の透明にひしひ
しと夕映え

鍵穴より入り来る夕陽は点となり生きゐて見るは極
小のかがやき

てのひらに果実ひとつが夕映えに熟れつつあらむ類型を
謳はば

はつなつ

『新選』
56号(2)

はつなつ遠き空の紺青こころ危ふければ言葉託さむ

昂ぶれるままの沈黙はつなろの座さむぎむと火を囲む
われら

くやしみのかかるときこそ詩を断たむ雨季ひとつりと
錆つく鉄

もつとも死に近く関はる八月無数に奔る言葉葬らむ

なかなか夏に至りがたし綻ぶは母が形見の麦藁帽
子

夏の寂

『新壑』
56-10号

かがやかに詩歌抱けどととととと温度計の至りがたき初
夏

夏の雷にうち砕かれし行間を甦らすかな余白の穹に

刻々と青年は思想を抱へこむ名遂ぐことより野のわ
すれみづ

かくばかり輝くものを呑みこみて寂然とふかき海の夕
風

呼び戻す記憶なきまま孤児達の巡る祖国の回転木
馬

逝く夏

『新壑』
56-11号

逝く夏をこころのかぎり謳ふかな綻びしままの麦藁帽
子

逝く夏のはなむけとなし繕ふは麦藁帽子・われの軀の
暇

声囁らしひとの名喚ばはむあさ月のしろがねさへやお
どろおどろし

顧みてふる里てふはわれの何血のつながりのわきまへも
あらず

母たりし妻たりし日の追憶のかぎりに茄子をバターに
炒めて

秋の迷路

『新壘』
56-12号

秋雷の短くすぎゆきおもはへば幾多こころに過失を負
ふや

飽くまでも天気は予報であつた筈・身のおろかしきま
でのずぶぬれ

こひこふや秋のこころのゆきくれて夜半の迷路に射す
月あかり

掌のひらに余る程なるひと房の葡萄のたしかに占むる
その位置

ありありと十月の闇蹴り上げてはばかりもあらぬわが
呱呱の声